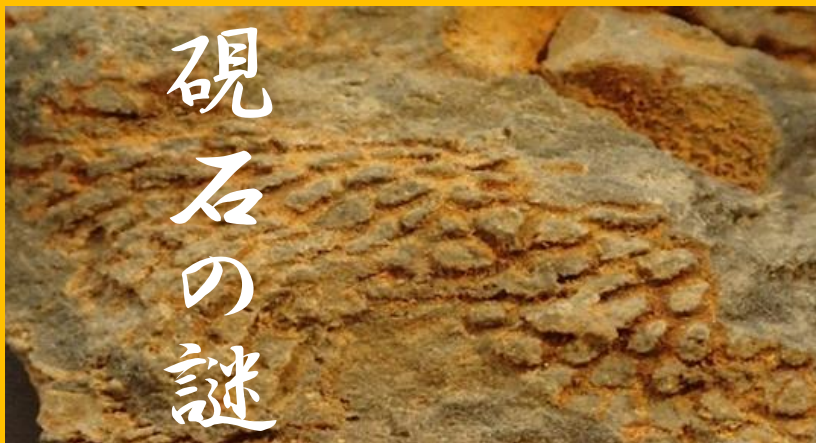


秋季企画展・関連展示「文芸×東海村」

硯の中の小さな大発見



多賀山地の粘板岩から見つかるコケムシ化石

硯石の謎を解く鍵は...

小さな動物の化石



村松白根遺跡出土の室町時代の硯(コケムシ化石含む)

会期 令和6年11月16日(土)～令和7年3月16日(日)

開催場所:東海村歴史と未来の交流館 展示室1

茨城県東海村村松768番地38 Tel.029-287-0851 e-mail:maruhaku@vill.tokai.ibaraki.jp

開館時間<平日>9時～19時 <土日祝>9時～17時 休館日 月曜日(月曜が祝日の場合はその翌平日)、12月29日～1月3日

主催:東海村歴史と未来の交流館

展示ストーリー ～硯の中の小さな大発見～

今から20年ほど前、東海村の海岸部に位置する村松白根遺跡から、とある硯が発見されました。

本遺跡は、室町時代以降の塩作りのムラの跡で、この硯（表紙写真）は、当地に文字を書く人がいたことを示す重要な証拠です。もしかすると、製塩を管理した人物が塩の生産量や出荷先などの情報を書き記すために使用した硯だったのかもしれません。

実は、この室町時代（約600年前）の硯に、驚きの事実が隠されていました。なんと硯の中に、太古に生きた小さな動物の化石が含まれていました。果たして、この化石は何を物語るのでしょうか。



硯の中の小さな動物化石(硯裏面)



大子地域の小久慈石と小久慈硯

ところで、茨城県の硯石を見ると、江戸時代以降では、小久慈石（国寿石）や梶畑石（久慈黒石）と呼ばれる粘板岩が有名です。これらは、県北部の八溝山地を起源とする中生代ジュラ紀（約1億7千万年前）の岩石です。

では、村松白根遺跡から出土した硯にも本地域の粘板岩が利用されたのでしょうか。観察の結果、硯石は八溝山地の粘板岩ではなく、多賀山地（日立市域）の粘板岩でした。

硯石の故郷の謎を解いた鍵は、硯の中から発見された「コケムシ」という小さな動物の化石でした。

コケムシは、現在も海や湖に棲息する無脊椎動物です。多賀山地の粘板岩からは、「フェネステラ」という種類のコケムシの化石が見つかります。実は、複数ある粘板岩産地の中で、コケムシ化石を含む粘板岩の故郷は、多賀山地の鮎川層（古生代ペルム紀・約2億6千万年前）に限られます。

つまり、室町時代の硯で発見した小さな動物の化石は、硯石の故郷が日立の山々であることを物語っています。このことは、中世以降の硯石やその流通を考える上で重要です。



東海村から見る多賀山地(撮影地:石神城跡)

きっと、この硯の持ち主も見慣れた硯の中に、太古の化石があったとは…夢にも思わなかったことでしょう。